

ディケンズが「クリスマス・キャロル」に込めた願い

ジョニー・デップ主演映画が公開！

●サバイバー●取材・執筆／本誌編集部

■19世紀に活躍した英国を代表する作家、チャールズ・ディケンズ。代表作のひとつ「クリスマス・キャロル（A Christmas Carol）」は、彼が31歳のときに書いた物語だ（肖像画は30歳のときのもの）。ジョニー・デップ主演による新作映画「Ebenezer（エベネーザー）」の公開を明日に控えた今号では、１８０年以上も人々を魅了し続ける、この名作について深堀してみたい。

クリスマスを間近に控えた夜、冷酷で金に執着する商売人エベネーザー・スクルージのもとに、7年前に亡くなった金貸業の共同経営者、ジェイコブ・マーレイの幽霊が現れる。スクルージと同様に非情だったマーレイは、生前の悪行のせいで天国へ行けないことを話し、「明日から毎晩3人の幽霊がやって来る。彼らがスクルージを救ってくれるだろう」と言い残して消えた。やがて姿を現した幽霊たちは、スクルージに自身の過去・現在・未来を見せていく。純粋で愛に飢え、孤独に耐えた幼少期や青年期、あまりに強欲なために嫌われ者となっている現在、そして死んだ後に誰ひとり自分の死を悲しまない未来…。スクルージは今までの所業を悔い、これからどう生きればいいのか幽霊に教えを乞う――。人間は変わることができる。心持ち次第で、未来は幾通りにも変化し続けるのだ。

「オリバー・ツイスト」「二都物語」「大いなる遺産」など数多くの名作を世に送り出したディケンズだが、父親の借金問題に悩まされた自身の幼少期を反映するかのように、作品の多くは孤児といった貧しい市民が主人公。「大どんでん返し」の連続でストーリーとして存分に楽しませつつも、社会変革の必要性や慈愛精神の大切さを訴えてきた。「クリスマス・キャロル」は、その最もわかりやすい例である。

１８４３年12月19日の発売からわずか６日で完売し、自らもスクルージのように心を改めて生まれ変わろうとする人々が続出するなど、一大ブームを巻き起こした同作。街中で人とすれ違うたびに「メリー・クリスマス！」と笑顔で挨拶を交し合い、家族で食卓を囲むために夕暮れには家路を急ぎ、これまで以上に寄付金の金額を増やす――。「スクルージ（Scrooge）」という主人公の名字自体が、「ケチ」「守銭奴」「強欲な奴」「意地悪な奴」を意味する名詞として定着するまでに至った。

クリスマスまで、あと６週間。あらためて物語を読み直してはいかがだろうか。

もっと知りたい人は…

クリスマスを生んだ、偉大なる文豪

チャールズ・ディケンズ

1 クリスマス・キャロルって「讃美歌」のことじゃないの？

クリスマス・キャロル（Christmas Carols）とは本来、キリストの誕生を祝う讃美歌や聖歌を指すもので、「きよしこの夜（Silent Night）」「諸人こぞりて（Joy to the World）」といった合唱曲の総称。ディケンズは、1843年の初版では「A Christmas Carol. In Prose. Being a Ghost Story of Christmas.（散文で書かれた、クリスマス・キャロル。クリスマスの幽霊物語）」とタイトルをつけており、讃美歌のようにクリスマスの精神を人々に伝える物語、つまり「クリスマスの賛歌」として出版した。そのため、本文も「Chapter（章）」ではなく「Stave（五線譜・詩の節）」という語を使って1話ごとを区切っている。



2 スクルージには実在のモデルがいた!?

刊行の2年前、1841年にスコットランドのエディンバラを訪れたディケンズは、ロイヤル・マイル沿いにあるキャノンゲート墓地で「Ebenezer Lennox Scroggie（エベネーザー・レノックス・スクルージ）」と名が刻まれた墓石を発見。そこには「meal man（穀物商人）」とあったが、ディケンズはそれを「mean man（意地悪で卑劣な男）」と読み間違え、「墓碑に永遠に刻まれるとは、なんと悲しいことだろう。一体どのような人生を歩んだのか」と思いを馳せたという。1836年に死去したとみられるスクルージ氏は実在したが、陽気で社交的な人物だったといい、後の墓地周辺の再開発によって墓石も失われたため、この逸話の真偽は定かではない。



3 スクルージの口ぐせは…

スクルージの代表的な口ぐせは「Humbug」。「戯言」「くだらないこと」といった意味で、スクルージは事あるごとに人々に対して、「Bah! Humbug!（フン！くだらん！／読み方：バー！ハンバグ！）」と捨て台詞を吐き、またクリスマスが近づいて人々がウキウキしている様子を見ては、嘲笑うように「Humbug!（ばかばかしい！）」と言い捨てる。そんな彼の心がどのように変化していくのか。バカにしていた「メリー・クリスマス！」を心から口にする場面は、物語のクライマックスになる。



4 ディケンズは幽霊の存在を信じていた？



クリスマス・キャロルには4人の幽霊が登場するが、「本物」と言えるのは7年前に亡くなったマーレイの幽霊のみ（左絵）。ほかの3人は過去・現在・未来のクリスマスの幽霊で、英語では「The first spirit, Ghost of Christmas Past（第1の精霊、過去のクリスマスの幽霊）」と書かれており、「精霊（spirit）」としての側面が強い。ヴィクトリア朝時代は超常現象や心霊現象への関心が非常に高まり、心霊ブームが起きていた。ディケンズもその例に漏れず、幽霊に強い興味を持っていたものの、実在については懐疑派で「Fascinated Sceptic（幽霊に魅了された懐疑論者）」だった。

5 未来のクリスマスの幽霊だけ、なぜ顔を見せないの？

白い髪で頭頂部が発光し、子どもにも老人にも見える幻想的な姿をした「過去のクリスマスの幽霊」、頭にヒイラギの冠、豊かな髪とひげを持ち、緑色のローブを身につけた陽気な巨人の「現在のクリスマスの幽霊」に対し、3番目の「未来のクリスマスの幽霊」はしばしばファンタジー映画で見かけるような、全身を漆黒のローブで包んだ不気味な姿で登場する。顔が見えないだけでなく、ただ黙って指を差すのみで言葉も発しない。これは死を告げる死神、あるいは死そのものや恐怖を表しながらも、「未来はまだ決まっておらず、変えられるかもしれない」という希望を含んだ不確かさを暗示している。



第1の精霊
過去のクリスマスの幽霊



第2の精霊
現在のクリスマスの幽霊



第3の精霊
未来のクリスマスの幽霊

「13日の金曜日」に上映スタート！

Ebenezer

（邦題：クリスマス・キャロル ３人のゴーストたち）



期待が高まる！
トレイラーは
こちらからどうぞ

過去に幾度も映画化されてきた「クリスマス・キャロル」が、奇怪な演技で異彩を放つ俳優ジョニー・デップを主演に迎え、『不吉』な 13 日（金）に世界同時公開される。作品タイトルの「Ebenezer（エベネーザー）」は、スクルージのファーストネーム。

ジョニー・デップが演じるのはもちろん、ロンドンで暮らすクリスマスが大嫌いな強欲な老人スクルージ。ほかに、貸金業の共同経営者だったジェイコブ・マーレイ役をイアン・マッケラン、スクルージが営む事務所で低賃金で働く事務員のボブ・クラチット役を「ハリー・ポッター」シリーズのロン役で知られるルパート・グリントが演じている。

6 ディケンズは執筆中、泣きながら笑って、徘徊していた…!?

ディケンズは 1843 年 10 月にクリスマス・キャロルの執筆をスタートし、クリスマス商戦に間に合わせるために約６週間で書き上げた。直前に刊行した小説の売れ行きがイマイチだった上に、妻は５人目の子どもの出産を控えており、経済的に苦しく焦っていたという。彼は執筆中、没頭するあまりに登場人物たちに深く感情移入し、書きながら自身も一緒に泣いたり笑ったり、また泣いたり…を何度も繰り返した。家族からしたら、さぞ情緒不安定に見えたに違いない。さらに人々が寝静まった深夜、街中を 15 ～ 20 マイル（約 24 ～ 32 キロ）もふらふらと歩きまわりながら構想を練っていた。完全に不審者である。

ちなみに、クリスマス・キャロルを完成させた自宅は現在、ミュージアムとなっている（写真右）。



7 当時の挨拶は「ハッピー・クリスマス！」ではなく、「メリー・クリスマス！」だった!?

クリスマスの挨拶は、英国流は「ハッピー・クリスマス」、米国流は「メリー・クリスマス」だと思っている人もいるのでは？「メリー・クリスマス！」と挨拶を交わすのが一般に広く普及したのはクリスマス・キャロルの影響だが、偶然にも同じ年に発売された英国初の商業用クリスマスカードにも「A Merry Christmas and a Happy New Year」と印刷されており、英国でも当時「メリー・クリスマス」は主流だった。「ハッピー」が好まれるようになったのは、1932 年に国王ジョージ５世が史上初となるクリスマス・メッセージのラジオ放送を行った際、「ハッピー・クリスマス」を使ったことが始まり。君主は代々この挨拶を踏襲しており、チャールズ国王も最後に「ハッピー・クリスマス」でスピーチを締めくくっている。

